

2部

フィールド フィールド
現場から現場へ

その人らしく生きること

～地域包括支援センターでの実習を通して～

1 はじめに

私は、昨年東北福祉大学の通信教育学部を卒業し、現在も地元の特別養護老人ホームで介護員として働いています。私の勤める施設は100名を超える利用者の方が生活しており、日々入所者の方によりよい生活を提供出来るよう取り組んでいます。卒業後約1年となり、通信教育部で学んだ事をどのように現場に生かしているか、実習での体験をもとに私なりに述べさせていただきます。

2 実習先決定まで

私は、地元の地域包括支援センターに実習に行きました。最終決定は地域包括支援センターでしたが、本来希望していた所は、「社会福祉事務所」や、「市役所の生活保護課」、「児童相談所」等の、行政や児童分野で実習をしたいと考えていました。その理由としては、先に述べたように現在高齢者施設に従事していることから、他分野での学びを深めたい、また、保育士・幼稚園教諭の資格を習得しているため、児童分野でも資格を生かすことができるのではないかと考えていたためです。しかし、私の住む青森という土地からか、実習指導者がおらず、希望する所での実習は叶いませんでした。また、こうして実習先を決定するまでの間、学校側と何度も連絡を交わしながら、県の社会福祉士会へも実習指導者のいる実習先などを問い合わせました。社会福祉士会からは「個人情報となるので、教えられない」とのことで、情報を得ることができませんでしたが、学校側からの

アドバイスにより、地域包括支援センターでの実習を決めることができました。

3 実習への承諾

実習先を地域包括支援センターに定め、あとは市内にある、どの圏域の地域包括支援センターにするかを決定しなければいけませんでした。私の勤める法人にも、地域包括支援センターはあるのですが、「仕事との切り替えが難しい」「甘えが出てしまうのではないか」といった考えから、他法人の管轄する地域包括支援センターに実習に行かせていただきました。私は、学習は比較的スムーズにいており、実習の目途もついていたため、半年ほど前に理事長に相談し、実習へ行かせていただくことへの承諾を得ることができました。また、分割した実習ではなく、公休を併用しながら有休を利用し、1ヶ月間みっちり実習へ行かせていただくことができました。

4 実習準備

事前の準備としては、まずは実習指導Aの課題として出される課題ノートの記入をしっかり行い、実習先の機能・対象者等できる範囲で把握することが必要になると思います。そして、これも課題となっている実習計画書ですが、より細かく、具体的に設定することをおすすめします。そうすることによって日々の目標を設定するうえで役立ちますし、実習終盤に目標としていたことを達成できていない場合には、実習指導者と相談し、実習に取り入れてもらうことが可能となると思います。これらの課題は多すぎるくらいでも大丈夫です。また、実習の進捗状況についてしっかりと、巡回や帰校指導時に先生もアドバイスしてくれる他、実習先のスタッフも

よりよい実習となるよう、とても熱心に教えてくれると思います。

5 実習開始

8/20～9/20までの1カ月間の実習でしたが、本当に濃い実習でした。実習指導者からも「こんなに濃い実習はないと思う。私も良い経験でした。」と言っていただけのほどの実習でした。実習を振り返ると、総合相談は日々行われ、介護保険の認定調査の立ちあい、成年後見制度利用の支援、生活保護ワーカーとの連携、民生委員との連携、アルコール依存症を抱え地域住民から相談された事例や、精神疾患から地域住民とのトラブルに発展し、医療保護入院となった事例などに関わらせていただきました。また、実習期間がこうした期間であったため、地域の敬老会にも参加させていただきました。その中でも実習中、私が一番記憶に残り、考えてしまうのは、孤独死の第1発見者となったことです。その方は、生活保護を受給しており、脳梗塞の既往歴から仕事ができず、アルコール依存となっている方でした。発見当時は炎天下ということもあり、脱水症から亡くなったようでした。家には食料も無く、空の缶ビールが多くありました。また、数日前に半裸で近くのコンビニに行き、警察に保護されており、その際も低栄養状態から病院へ搬送されていました。病院へ搬送された後に実習指導者と訪ねた際には不在だったのですが、数日後生活保護のワーカーと訪ねた時に亡くなっているのを発見しました。発見時、実習指導者と「なぜ何度も訪ねなかったのか」「昨日来ていれば…」と、とても悔やむ思いが募りました。この体験を通し、「その人らしい生活とはなにか」「権利とはなにか」ということについて深く考えることができました。

6 実習を振り返って

実習を振り返り、仕事に戻ると多くの視点で利用者の方と接することができるようになりました。私は仕事をしている際、権利擁護とは「不適切なケアを行わないこと」と考えていましたが、実習を通し権利擁護とは「その人が自分らしい生き方をする権利を守ること」であると考えることができました。また、これまでも帰宅願望や、自宅や家族を心配する方に対し、その人の立場に立って考えていたつもりでしたが、実習を通し、施設へ入所するまでの背景を知ると複雑な思いでした。自らの意思で施設へ入所している方はとても少なく、「納得」ではなく、「あきらめ」の気持ちで施設へ入所している方や、家族の意向が本人の意向のように捉えられていることが多くあるのだと感じました。

7 さいごに

卒業後振り返ると、私が通信教育学部で過ごした2年間は本当に楽しいものでした。私は、日々勉強し、知識がつくこと、視点が增えることが本当に楽しく、2年間で苦しいと感じたことは1度もありませんでした。本当に楽しい日々でした。ただ、家庭を持つ方や、お子さんのいる方は上手く学習する時間を確保することが難しいと思います。そうした中でもモチベーションを維持し、学習を続けることは大変難しいことではないかと思えます。ただ、私の主観ばかりで申し訳ないのですが、学ぶことを楽しんで欲しいと思います。人により、楽しいと思うポイントは異なるかと思いますが、一生懸命書いたレポートに先生がくれるコメントや、スクリーングで仲間と会うことなどを楽しんでいただけたらと思います。また、実習は本当に貴重な経験です。私は、実習で多くの高齢者と「ゆっくりと話ができる」ということが、すごくうれしく感じました。現場にいと、日々

の業務に追われ、なかなかゆっくと高齢者の方に寄り添うことはできないと思います。また、実習で会う、地域の方や、各専門職との方の出会いも大切にさせていただけたらと思います。私のような者が木で鼻を括るようなことを申しあげましたが、皆さんの今後の通信教育を学ぶ上で、少しでもお役に立てたらと思い、寄稿させていただきました。私を含め、現場には福祉大の卒業生も多くおり、皆さんを応援していると思います。毎日を大切に、学習することを楽しみ、頑張ってください。